

## EUにおける留学生へのフレームワークづくりの概念に学ぶ アフガニスタンの女子教育支援

藤 枝 修 子

(お茶の水女子大学開発途上国女子教育協力センター)

森 義 仁

(お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科)

### 1. はじめに

すでに多くの人たちが知るように、アフガニスタンではソ連侵攻に続く民族紛争やタリバン政権により過去四半世紀もの長い間戦乱の中に置かれた。女子の学校教育、女性の社会的活動のみならず、外出や身なりに至るまで制約されていたと聞く(五女子大学コンソーシアム2002)。女子や子どもへの教育は家庭内で母親の役割として行われたが、混乱も続き、女子の識字率は極端に低下した。これらの情報が新聞やTVなどで報じられる中、藤枝は2001年12月7～8日のCICE主催第5回国際教育協力フォーラムに長尾眞文教授のご好意により出席する機会がえられた。このきっかけでアフガニスタン女子教育支援が始められ、日本からの女子教育支援プログラムが具体的に検討された(藤枝修子2002)。日本の女子高等教育には100年来の歴史をもつ5つの女子大学(あいうえお順にお茶の水女子大学、津田塾大学、東京女子大学、奈良女子大学、日本女子大学)がコンソーシアムを形成し、女子教育への経験とノウハウを生かして、アフガニスタンの初等・中等教育をになう女性教員の資質向上と再教育を目的として立ち上がった。具体的には、教育現場の責任者・リーダーとしての中学と高校の女性校長、教員養成大学の女性教員など、指導的女子教育者を対象とする支援であった。小学校4年生から高校までの学校教育は習慣上から男女別学で、女子クラスを担当す

る女性教員の養成が急務とされ、支援対象を女性の教育指導者に限定した(五女子大学コンソーシアム2006)。来日研修は文部科学省とJICAのご支援により、2002年度～2004年度(フェーズ1)と2005年度～2006年度(フェーズ2)に行われたが、大学教員はフェーズ1の3年間のみで、合計22名が来日した。カブール以外の8地域にある教員養成大学からも研修に参加したが、4～5週間の研修期間では中途半端との意見が多かった。当時のファエズ高等教育大臣の切なる希望から、日本では国費留学生枠が設けられた。女子大学では、お茶の水女子大学、日本女子大学などでカブール大学と大学間協定が結ばれ、若手女性教員が来日する道が開けた。奈良女子大学を含む3つの女子大学の理系分野へカブール大学から女性教員が国費留学生として来日した。この留学生を身近に指導するなかで、受け手の教員側にもいろいろな混乱が生じている。今までに留学生の指導には長い経験をもつが、その範囲を大きくこえる問題が浮上してきた。アフガニスタンの国情や現状を知る教員がまだ少なく、問題の多くは、アフガニスタンにおける女子教育や女性の立場などを十分に理解した上で、きめ細かい学生指導が求められる内容である。指導教員の価値観や個人的判断に大きく左右されないような一般性のある基本的発想が必要と思われた。このような背景から、本稿に記載するような情報収集が求められた。

## 2. アフガニスタンからの国費留学生

中国、韓国、東南アジア諸国からの留学生受け入れは、すでに行われるようになって久しい。私費にせよ、国費にせよ、留学生の人数も相当数にのぼるため、受け手の私たち教員間での情報交換も頻繁に行い、学生の出身地、来日前の学習歴、家族や家庭の状況、価値観、性格や人柄などを含めた対応の仕方を、試行錯誤を繰り返しながら懸命に学んできた。留学生の存在は研究室内の日本人学生へもよい影響を与えている。

アフガニスタンからの国費留学生は本学に一期生が来日してから4年半になる。五女子大学に限れば、理学部がある3女子大学(お茶の水女子大学、日本女子大学、奈良女子大学)がともにカブール大学から女子留学生を受け入れている。3女子大間では、留学生間の交流の機会も設けている。なぜ理系分野ばかりが受け入れるかは、指導教員として手をあげてくれる教員がいることが最も大きい理由だと思われる。英語による意思疎通が難しいなかで、言葉の壁を越えた共通理解を進めやすい領域を今までの女子教育支援の経験から私たちは学んだ。数式や化学式などは万国共通であり、実験室機器などは実物があれば理解を助けることができるので、過去の来日研修のひとこまで、カブールからの校長や教員が高校の数学や化学の教壇に立ったときのことが参考になった。本学では、平成19年度4月現在、D2, M2, M1にそれぞれ1名ずつ在学し、D1相当の学生は博士前期課程修了後に帰国した。小さなコミュニティーができていて、新たに留学生が来日する際には成田空港へ出向いたり、キャンパス内の情報、買い物など日常生活へのアドバイスなど細かいことが引き継がれている。価値観、性格や人柄などは人による違いも感じるが、おしなべて研究や勉学への取り組みはよい成果をあげ、うまく進行していることに感心させられることが多い。附属学校では何回かゲス

トとして話に加わったり、アフガニスタンでの習慣などへの質問に答えてもらっている。また、五女子大学コンソーシアムによるJICA研修でも日本の状況を伝たり、カブールから研究者が来日する際に急きょ旅程が変更されたときの電話による対応など、アフガニスタンとの交流が増えることによるダリー語での対応は、大学としても大いに助かっている。

日常生活面では、全く問題を感じさせないが、実験的なスキルや専門分野の問題を解決する能力などの面にはやはり問題がある。日本のような平和な国では、基礎学力や論理的思考力は子どものときから一歩ずつ必要な時に必要な内容を順序だてて時間をかけて学んでいる。学ぶ機会に恵まれなかったアフガニスタンの女性たちは、この点について、今後どのように解決の方向性を求めるかが急務であろう。特にアフガニスタンからの留学生に対しては、可能な限りTeam Teachingを実行し、指導教員が一人で悩むことがないように心がけている。指導教員と留学生の価値観の違いから、学生が不利益をこうむることがないようにしなければならないと考えるからである。本学と日本女子大学の関係教員が意見交換の場を設定して共通理解を求めるとも行っている。アフガニスタンからの留学生が研究を進める上では、指導教員の間での十分な意思統一が重要であろう。ある教員は基礎学力が低いことを嘆き、またある教員は来日1年毎の成長ぶりに感動するなどである。アフガニスタンの女子生徒たちや女性たちが今まで置かれてきた状況、現状を理解すれば、基礎的な学力を身につけることは十分に可能であるが、国費留学生の限られた時間内で、専門性の高い成果が求められるため、かなりの創意と工夫が必要である。単位取得のためのハードルを下げることは容易だが、この選択肢では問題解決にはならない。

### 3. ドイツの大学での取り組みに学ぶ

今さら触れる必要もないが、ドイツで学ぶ留学生のために D A A D (Deutscher Akademischer Austausch Dienst)ではいろいろなサービスが行われている。著者らは平成 19 年 3 月にドイツへ行く機会をえたので、ケルン大学とパーギッシェ・ブッパタール大学を訪問した。

本学の留学生 1 期生が来日する前に、カブール大学理学部の教員数名がケルン大学理学部で専門分野に分かれて約 1 ヶ月の研修を受けたと言う。当時受け手となった有機化学が専門の H. G. Schmalz 教授は、現在は理学部長の要職にありながらもアフガニスタンの教育への関心は持続し、現地の状況もよく理解しておられた。5 年以上前になるが、英語も通じない、コンピュータも使えない、実験の経験もない・・・。開発途上国からの留学生には数々の経験をもつ当教授も、さて、このアフガニスタンの女子教育の遅れをどのように打開し、一步一步改善に向けて進めていくかを考え、途方にくれたとのことであった。五女子大学コンソーシアムが 2002 年 8 月にはじめてカブールを訪問した際に、私たちが見聞きした現状と同じであった。本学での留学生の今の状況を話し合う中で、まずは 1 人の留学生について言えば、「学びたい」という学生自身の熱意に支えられながら、本学の関係教職員の絶えざる努力は大きな前進を勝ち得たことを実感した。

本訪問の最も重要なテーマは学位のレベルをどのように維持するかであった。上記のように、国費留学生は期間が決まっているなかで、基礎学力や周辺の知識の取得にもそれなりの時間が必要である。来日時に比べて、修士課程の 2 年間、博士課程の 3 年間の各進歩と成果が、日本人学生や他国からの留学生などと比較して遜色がなく、修士や博士の学位にふさわしい内容とレベルが十分であるとの判断が無理なく行えるかの問題である。程度

を下げることは、大学の品格を下げることになり、決して好ましい選択肢ではない。留学生を受け入れている女子大学でも、安易な選択は行っていない。

EU 諸国でも同じことが問題になり、The Chemistry “Euromaster” が ECTN (European Chemistry Thematic Network Association) で検討され、2006 年 7 月 20 日に最後の改定を行ったドラフトを H. G. Schmalz 教授からいただいた。化学および関連する工業、公的なサービス機関に従事するプロフェッショナルとしての化学者が修士の学位をもつときに標準的に求められるレベルを詳細に述べたものである。これはドラフトであるが、同様の The Chemistry “Eurobachelor” はすでに 2005 年 6 月 6 日 V2 が最新版である。Bologna 宣言を受けて、2003 年 9 月の Berlin コンファレンスで化学の学位を BSc/MSc/PhD の 3 サイクル構造にすることを決めた。Bologna プロセスはその後非常に速く進展し、2001 年 2 月の Helsinki コンファレンスで定義されたように、最初のサイクルの学位 (BSc) が Bologna 付近からヨーロッパ全域の 45 ヶ国で標準化されている。Helsinki 合意ではバチェラーの学位では 3 ~ 4 年間で 180 ~ 240 ECTS 単位 (credit) が必要と考えられていたが、180 単位の方がより一般的であるとされ、Eurobachelor model では 180 ECTS 単位が必要である。卒業に求められる成果として General, Subject Knowledge, Abilities and Skills, Content, Distribution of credits, ECTS and Student Workload, Modules and Mobility, Methods of Teaching and Learning, Learning, Assessment procedures and performance criteria, Grading, The Diploma Supplement, Quality Assurance などが詳細に記述されている。Distribution of credits では、180 単位のうちの半分をコアとして、自分の専門分野や好きな分野にかたよることなく、化学

の5分野（分析化学、無機化学、有機化学、物理化学、生物化学）と物理学、数学から単位取得をしなければならないと決めている。コミュニケーション能力は、母国語に加えて、ヨーロッパの主要言語（英語、ドイツ語、イタリア語、フランス語、スペイン語）の一つにより、書くこととoral communicationの両方が求められている。要求される程度にもよるが、この点だけでも、大変なことと思われる。これらの取り組みは、EU諸国の学生だけでなく、想像しただけでも多様な留学生が入学してくるであろうEUの大学が、いろいろな経験をもとに、その格差をなくするための努力から生まれたものと考えられる。

特に、H. G. Schmalz教授との意見交換の中で、日本とあるアジアの国からきた留学生の考え方を比較された。ともに、よく勉強し、実験し、化学的成果も遜色はないが、日本人留学生はドイツのspiritを吸収したいと願う気持ちに大きい差があることを述べられ、印象的であった。

もう一つの訪問大学は、パーギッシュ・ブパタル大学である。ルール・ザール地方にあり、150年前にネアンデルタール原人が発見されたネアンデルタールに近い。留学生センター長のG. Rott教授を訪問した。開発途上国からの留学生を受け入れたときの共通する問題は心のケアが必要になる学生が多く、センター長ご自身もカウンセラーである。その他何人かのスタッフも女性カウンセラーであった。特に具体的な事例にまでは立ち入ることはしなかったが、育った背景や文化、宗教などが異なる国へ勉学のためにやってきて、はじめのうちは悩みを聞いてもらえる友達もなければ、思い悩むことも多いであろう。留学生の視点からは、共通の問題であり、実は大切なことだと思われる。本学のアフガニスタンからの留学生は、人数も複数になったため、今はダリー語による情報交換が可能になったが、受け入れはじめは、本学と日本女子大学などの大学を越えた留学生の交

流が行われた。大学としてはカブール出身の客員助教授に、ダリー語による悩みごとの相談や話し相手として定期的に来てもらっていた時期もあった。

#### 4. アフガニスタンの女子教育支援における問題点

本学では五女子大学コンソーシアムの世話大学としてアフガニスタンの女子教育支援（藤枝・内海 2004）を行ってきたが、その中から、女子高等教育のリーダー育成に特化するには、初等・中等教育のための女性校長研修とは別に、カブール大学から女性教員を国費留学生として修士・博士の学位取得を視野に入れた受け入れが必要と考えて、今日状況へと発展した。文部科学省の寛大で将来を見据えたご支援を受け、何人も留学生が来日して今日をむかえている。習慣、環境や宗教などの違いによる心の問題を当初懸念していたが、担当教員と周りの支援者たちの気配りなどにより、全くなかったかどうかはわからないが、表に現れることはなかったと思っている。現地での名門大学のエリート教員であり、年齢的にも学部学生レベルではないので、問題があったとしても自分たちで解決するすべを持っていたのであろうか。

つぎに、これから求められる女子教育支援として、長期にわたる女子初等教育、特に小学校段階の充実があげられる。先日、アフガニスタン教育相が来日され、小学校の女子クラスで授業を担当できる大勢の女性教員の育成が急務とのことであった。また、カブールに集中することなく、各地域に女子寮を併設する短期大学レベルの教員養成大学を新設したいとのことであった。これからの女子教育こそが、アフガニスタンにとって本番というべきときのように思える。人数は少ないがカブール大学からの国費留学生が近未来に大きな活躍をしてくれることを期待している。

アフガニスタンから来日した研修員や国費

留学生と直接接する機会のある日本人学生や生徒たちは、かたことの英語や通訳を介した対話により、異文化交流を実際に行っている。このこと自体は極めて貴重な機会ではあるが、日本人にとってのダリー語とアフガニスタン人にとっての日本語はやはり簡単には越えられない壁と言えるであろう。また、カブール大学からの国費留学生の日常生活や勉学の状況を身近で見ると、自分の専門分野に直接不可欠な基礎知識や周辺分野への展開には相当の時間をかけている。現実には日本語の勉強までは、なかなか手が回らないというのが正直なところのように見受けられる。

このたびのドイツでの訪問先は2大学に過ぎなかったが、留学生と日夜向き合う経験者同志の直接の意見交換は、訴えるものが多々あった。しかも、破壊の進んだカブールの町を自分の目で見た理系人間同志であり、実験機器が全くないところでの化学教育の復興に深くかかわる化学者として意気投合するものを実感した。理数系分野は数式表現や化学式は万国共通で母国語に依存せず、さらには言葉なしで通じ合えるので、言語や文化的背景の影響が小さいとよく言われるが、これは程度の問題である。この理数系分野を通しての女子高等教育により、近未来にアフガニスタンの女子教育界をリードするであろう若手研究者の育成こそが、着実に確実な女子教育支援になると確信している。今までに日本で学んだ外国人留学生はおびただしい人数である。どの国からどんな専門分野で、何を学ぼうとして、どの大学で学んだのかなどはまちまちである。少なくともアフガニスタンの女子教育および女子高等教育を支援する立場では、EUのような徹底した基準づくりをすぐ実現させることはできないとしても、今後は、日本の中での修士や博士の学位に対するレベルを確保するために、基準づくりを進める必要性を強く感じている。理数系に特化した専門性の高い議論ではあるが、この方向性

は、留学生を受け入れる指導教員や支援者たちの負担を軽減することにつながり、責任感の重みや悩みの解消にもなると考えている。

## 参考文献

- 五女子大学コンソーシアム (2002) 「アフガニスタン教育支援現地事前調査報告書」.
- 五女子大学コンソーシアム (2006) 「アフガニスタンの指導的女子教育者のための研修総括と評価 報告書」.
- 藤枝修子 (2002) 「アフガニスタン女子教育のための女性教員研修プログラム策定検討委員会に参加して『お茶の水女子大学附属高等学校研究紀要』47巻, 1-16頁.
- 藤枝修子・内海成治 (2004) 「アフガニスタン女子教育支援 五女子大学コンソーシアムの取り組みと今後の課題」『国際教育協力論集』7巻2号, 81-88頁.